

藤村かおり
Kaori Fujimura

ガールズ トーク ク.





藤村かおり
Kaori Fujimura

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-111)

光文社 文芸編集部

ガールズ・トーク

一九九四年 四月二五日 初版一刷発行

著者 藤村 かおり

発行者 大坪 昌夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二―一三

電話 東京(〇三)三九四二―三二四一(代)

振替 東京六一―一五三四七

印刷所 大日本印刷

製本所 大日本印刷

定価 一、四〇〇円
(本体一、三五九円)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 © Kaori Fujimura 1994
ISBN4-334-92233-3 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

girls・トーク
contents

1	WISHES	5
2	陽だまり	21
3	メリー・ウイドウ・クリスマス	39
4	フォーチュン	55
5	シンデレラの靴	73
6	ハーフ・タイム	89
7	ティフオーソ	107
8	水の匂い	125
9	夏の終わり	143
10	闘う女	161
11	カラリング	177
12	TEA FOR TWO	193
13	夢見る宝石	215
	あとがき	236

ペーパー・トイ 安座上真紀子
写真撮影 谷崎春彦
装幀 スタジオ・ギフ

ガールズ・トーク

藤村かおり

1; WISHES
moonstone

信号が青に変わると、なつきは飛び出すようにして横断歩道を渡った。

ジャケットをひるがえし、ひととひとの間を縫うようにしてどんどん歩いていく。品川駅の正面からまっすぐに伸びる坂の途中に、目指すホテルはある。幼なじみの亜矢子の結婚披露宴が、もうすぐそこで行なわれるのだ。

仲間はもうとつくに集まっているだろうと思いつつ、腕時計を見る。この遅刻癖は、今にはじまったことではない。また皆に怒られてしまう、と焦って歩を進めているうちに、なつきの胸の奥にふと懐かしい気持ち芽ばえてきた。今は移転して別の建物が建っているが、この坂を上りきったところに、通っていた初等科があったからだ。

遠い日々が、よみがえってくる。小さな体にセーラー服を着こんで、白いソックスと革靴を履いて、六回の春夏秋冬を過ごした。朝礼に遅れそうになるとこうして坂を駆け上がつたけれど、走るたびに胸のポケットで定期入れが揺れ、ランドセルが背中カタカタ音をたてていたっけ……。

回転ドアを押し、息せき切って、ホテルに飛びこむ。そしてクロックにコートを預ける

と、なつきは足早に会場へとむかつていった。

席に近づいていくと、いきなり「おそーい」と声が飛んできた。久しぶりに会う仲間たちが、めかしこんでテーブルを囲んでいる。

「早く座りなよお」

舞が舌足らずな声で手招きする。

「その服かっこいいね、なつき……いいないいな、パンツスーツ似合ってさあ」

相変わらずの童顔で、舞は微笑む。舞は依頼心が強くとても甘えん坊だが、これでもしっかり幼稚園の先生をしているのだ。どっちが子供かわからないじゃない？ そんな冗談をなつきは言ったことがあるが、格好のせいではけいに子供っぽく見えるのかもしれない。今日も大きな白襟のAラインのワンピース、そして大きなリボン髪につけている。

「久しぶりね」

美和が、肩のところで小さく手を振る。

洋酒メーカーに勤める美和は、OL生活を十分楽しんでる様子。派手好きでちょっぴりわがままで、そして目立ちたがり屋のところは昔と変わらないが、いつ会っても潑刺としているので、こちらまで元気が出るようだ。今日はロイヤルブルーのスーツに身を包み、長い髪をくるくると巻いて、いちだんと華やかな雰囲気をただよわせている。

「なつき、髪伸ばしてるの？ なに？ 心境の変化？」

正面に座るリサが少しハスキーな声で言い、こちらをじっと見る。なつきは、まあね、

と笑いかえす。繊維会社で営業をするリサは、いつも忙しそう。今日はベロアのシックなツイードのせい、普段より大人びて落ち着いて見えるけれど。リサは前髪を上げていて、おでこがトレードマークだ。髪も長く、見かけはけっこう女の子らしいのだが、性格がともさばさばしている。それに怒るとけっこうこわい。正義感も強く、昔はよくけんかの仲裁をしていたものだ。

これから花嫁姿で登場する亜矢子、そして、舞と、美和と、リサと、自分と。五人のメンバーで以前はしょっちゅう遊んでいたものだけれど、高等部を卒業してから七年。電話でうわさは流しあうものの、全員で集まることは少なくなっていた。職場の同僚やボーイフレンドとのつきあいに忙しく、約束の日時をあわせることもだんだん難しくなってきたのだ。

けれど、会わない日にちがどんなに続いても、顔をあわせれば気を遣うことなく、男の子の話やおしゃれの話などで盛り上がった。性格はそれぞれ違うのに、皆あまり男運がよくないという共通点もあり、とくに誰が誰とつきあうとか別れたとかいう話は、仲間うちの最大の関心事だった。そんななかで降ってわいたような亜矢子の見合い結婚宣言は、誰にとってもセンセーショナルなものだった。

とりわけなつきは複雑な気分を味わっていた。グループのなかでとくに親しいのは亜矢子だったし、報告もまっさきに受けていたから……。

まもなく司会者の声が会場に響いた。

「新郎新婦のご入場です」

高らかに音楽が鳴り、照明が落ちた。部屋の後ろの扉が押し開かれ、腕を組んだふたりの姿が闇のなかにくつきりと浮かび上がる。そして、光の筋に導かれるようにして、ゆっくり、ゆっくりと、ふたりが部屋の中央に進んでくる。

「おめでとう」

長いトレーンを引きずるようにして、しなしなと歩いてくる亜矢子に、皆いつせいに拍手を送った。涙腺の弱い舞は早くも目をうるませ、美和は憧れたように瞬きもせず、亜矢子の姿に見入っている。きれーい、と言うリサのささやきに、なつきもうん、とうなずいた。

亜矢子の両親、親戚、友人、勤めていた電器メーカーの同僚、上司。それに新郎の両親、親戚、学生時代の友人、彼の職場の同僚や、上司。そして、亜矢子の父親の経営する建設会社の役員が何人も出席して、〈飛鳥の間〉は賑わっていた。

「えー、新婦の亜矢子さんはM学園の、初等科、それから中等部、高等部を優秀な成績で卒業されました。英語が得意でして、その後は聖心のほうに進まれました」

仲人の緊張した声を聞きながら、美和が小さく吹きだして「英語が得意」、と繰り返した。

英語は苦手で、でもどうにかエーセン（聖心女子専門学校 英語科）にもぐりこんで。

そう仲人が言ったらもとおもしろいの、となつきも思った。それにしても、親友の結

婚は嬉しいはずなのに、なぜだか素直に喜ぶことができないでいる。間際まで複雑だったが、披露宴がはじまると、ますますなつきの心は揺れてくるのだった。

シャンパングラスを口もとに運び、人形のようにちよこんと座っている親友の顔をながめる。

ずっと一緒だったのだな、とあらためてなつきは思う。さかのぼること二十年前、幼稚園の頃からの知りあいだから、亜矢子の親の性格のことまでよく知っていた。

「ほんといたれりつくせりね。ドレス、特注なんでしょ」隣りでリサがため息をつく。

亜矢子の白い腕に、ふわりとした半袖がよく似合った。

「でもあの子すごく緊張してるね、それに痩せちゃった。プクプクしてたほっぺがやけにスッキリしちゃって」リサが神妙な顔で続けた。

「結婚前は誰でも痩せるっていうけどね、やっぱり亜矢子もいろいろあったわけだから」なつきがぼそつと言うと、皆が同時にぱつと顔を見あわせた。

その言葉を聞いて、誰もが同じことを頭に思い浮かべたのだ。なんとなく話題を避けていたけれど、本当は大きな声で話しあいたくしてしまうがなかった。亜矢子はなぜお見合いしたのだろう、どうして前の彼のことをふっきれたのだろう、よくふっきれたな、と。

一心に花嫁の艶姿^{あですがた}を見ていた友人たちは、その視線の先をふつと左横にずらす。

なつきは一度会ったことがあったが、ほかの仲間は新郎の姿を今日はじめて見る。

「やさしそうなひとじゃない」リサが自分に言い聞かせるようにつぶやく。

「五つ上だっけ。亜矢子よりずっと大人って感じ？　なんかよくわからないけど」舞が小声で言う。

「私、ぜんぜんわかんない」美和が口をとがらせて言った。「だって亜矢子あんなにわがままでうるさかったのよ。好みだって……智史君とぜんぜん違うしさ。いまいち納得できないな、なんか親の言いなりになっちゃったみたいで」

「でもまあ、亜矢子だって悩んだすえに決めたわけだし、それなりに考えもあったんだろうし」と、なつきはなだめるように言う。そして亜矢子と過ごしてきた十代と二十代、智史のこと、亜矢子に、週間前手渡されたイヤリングのことなどを、次々に思い出していくのだった。

背は当然一七五センチ以上、髪の毛は柔らかめで、ちよつと茶色がかっていればなおよくて、眉毛の形はまっすぐで、目は切れ長の一重に限る。テニスとスキーは常識、もちろんおしゃれで、楽器もできなきやだめ……。

以前、好きな男の子のタイプの話になると、亜矢子は目を輝かせてそう言っていた。はいはい、と聞き流しながらも、なつきもまわりの子も同じような、もしかしてそれ以上の理想像を持っていたし、好きなひととのつきあいが結婚につながるのが当然だと、心のどこかで夢を描いていた。

ひよつとして智史って理想に近いかもしれないわ。亜矢子がそうのろけしたのは、短大を出て三年が過ぎた頃だ。小川智史は初等科のクラスメイトだったが、卒業と同時に親

の転勤でアメリカに行き、何年もその姿を見せていなかった。帰国して日本の大学に入っていた智史とクラス会で再会し、いつしか亜矢子は彼とつきあいはじめた。

「ほうら見て見て。これ智史にもらっちゃった」

ある日、イヤリングが耳もとでキラキラと光りながら揺れていた。

「なあにその石」となつきが聞くと、亜矢子は嬉しそうに答えた。

「ムーンストーンよ」

「ムーンストーン？」

その石は、反射して何色にも見えた。

「『不思議な力があつて、いろんな願いがかなうんだよ』って彼が言うの、ロマンチックよね、そういうのって」亜矢子はにこにこ笑いながら言った。

ダイヤにルビーにアメジストに、亜矢子はアクセサリを数え切れないほど持っているのに、会うとよくそのムーンストーンのイヤリングを耳に飾っていた。子供の頃、私も智史が好きだったんだよ、となつきが冗談まじりに耳もとを見て言うと、「ええっ、なつきが？」とけらけら笑い出すのだった。

「だって仲悪かったじゃない」

小柄で色白でおとなしい亜矢子は、子供の頃よく男の子にからかわれていて、いつも側そばにいたなつきは、亜矢子をかばって男の子たちに文句を言っていたのだ。ボーイッシュで大きななつきと、お人形みたいな亜矢子のコンビ。よくそんなふうにひとに言われたもの

だった。イヤリングをぼんやり見ながら、亜矢子はこのまま願いがかなって智史と結婚するのかな、羨ましいな、と思っていた。

智史は大学を五年かかって卒業したが、就職はしなかった。ミュージシャンになると言って、学生の頃からのバイトをライブハウスで続けたのだ。アメリカ育ちの智史は、生活スタイルも発想も自由気ままだったのだろう。次男坊なのでよいに身軽だったのかもしれない。ああだこうだと口うるさい親を持つ亜矢子は、そんな彼にますます魅かれていくように見えた。

亜矢子が始めて智史と結ばれた日のことも、なつきは誰よりも先に聞いていた。そんなことを懐かしく思い出しながら、新郎の斉藤さんの顔を見る。

眉毛がちよっと下がって、目は奥二重、髪の毛はまっ黒で、わりとかたそうで……。

「斉藤は学生時代からヨットひと筋で、取柄は年じゅう黒いことくらい。歌が好きでよくカラオケにも行きますが……まあ聴かないほうが幸せでしょう」

新郎の友人の話に耳をかたむけ、智史とはつくづく違うタイプなのだ、となつきは考える。亜矢子の親が智史とのつきあいに反対ししたのは、彼が大学を出てからだだった。

同窓生だけれどだめだ。性格はよいけれど、経済力がないじゃないか、と。

「ひどいのよ。門限が十時なのはしょうがないにしても、なるべく私の家で会っていうの。日曜の昼間によ、信じられる？」

彼女の父親の心配は、日に日にエスカレートする一方だった。いつだったか亜矢子が泣